

イタリア滞在記

ユキーナ・富塚・サントス

イタリア滞在記

ユキーナ・富塚・サントス

イタリア滞在記

ユキーナ・富塚・サントス

1	イタリア行きが決まったら・・・	4
1.1	最初のイタリア旅行	4
1.2	二度目のイタリア行き	6
1.3	イタリアは危険か？	7
1.4	どうしてシチリアなのか？	8
2	ヴァカンツァ イタリアの醍醐味	10
3	バカボンダ放浪記	13
3.1	タオルミーナ	20
3.2	アル・マーレ 海にて	23
3.3	ビキニ	24
3.4	太陽がいっぱい	25
3.5	マッハ GoGoGo！	28
3.6	イル・ポステイーノの家	30
3.7	満点の星	31
3.8	絶対絶命	34
3.9	イタリア南の掟	35
3.10	オヤジの花道	36
3.11	ネッロ・ダーボラ	43
3.12	「いい頭」のわたし！	44
3.13	窓からローマが見えた	45
3.14	インサイダー	46
3.15	ヴィトンの美学	47
3.16	オーソレミーオ	48
3.17	グンナイベイビー	50
3.18	天才ヴァガボンダ	50

4	ネホリーナ・ハホリーナ 好きこそものの上手なれ (その1)	52
5	ディヴェルティメント Divertimento(楽しみ)	54
6	セグレート sedreto(秘訣)上げようとせず、落とさんとすべし	59
7	一人の怒れる日本人	61
8	—ケンタッキーの法則—	64
9	さまよえる日本人	65
10	中田と呼ばれた女	67
11	ふぞろいの野菜たち	70
12	ああ大人の女	72
13	ミセントジュ	76

イタリア滞在記

1 イタリア行きが決まったら・・・

1.1 最初のイタリア旅行

ほんの1週間の旅行であれ、はたまた私のごとく1年を超える滞在であれ、イタリアに行くことが決まったら、しなければならないことはたくさんある。

何を持って行くかきめて、書類の申請など必要な事務手続きは面倒でもやらなければいけない。もちろん、ほかにやることは山ほどある。

が、しかし、どんなに忙しくてもやってもらいたいことが一つだけある。それは「大聖堂」という本を読むことである。今まで何人もの人にすすめているので、私を知る人はああ、またかと思われるかもしれない、しかし、あえて書かせていただく。

数年前、イタリアに関するセミナーでこんなコースがあった。ある建築家の先生が、イタリアの面白い街、小道や広場、回廊や建物、風景をスライドを交えながら解説してくれるというもので、そのときはイタリアの建築物、特に回廊を特集していた。

教室を暗くして、スライドを回す。かなり粋な先生で、イタリアのカンツォーネなんかをBGMにして雰囲気作りをしてくれたりする。

アッシジの大聖堂の回廊を見ていたときではなかったかと思う。建築家の先生がこう語った。

イタリア滞在記

ユキーナ・富塚・サントス

「大聖堂」という本を知っていますか？上・中・下と三冊あって、どれもとっても分厚いんだけど、面白いからあつという間に読んじゃうんだよね。まあ、冒険有り、恋愛有り、人生の波乱万丈有り、続きが待ちきれなくなって、歯磨きしてる間でも読みたくなっちゃうの。えーと、作者はだれだっけかなあ、まあ、とにかくおもしろい本なんで読んでみてください。

新しい物好き、試したがりの私としては、この話を聞いて読まないわけにはいかず、早速、翌日図書館で文庫版を借りて読み始めた。ちなみに作者はイギリスのアドベンチャーもののベストセラー作家ケン・フォレットである。

読み始めてみて、なるほど、確かに面白いと納得した。おそらくオリジナルの文章が短くまとめられているのだろう。翻訳も歯切れが良く、展開がスピーディで、ダイハードの映画を劇場で見ているかのような臨場感があった。話の流れに乗って読み進むうちに、どんどん物語の舞台に引き込まれていく、メガネをはずして、流した涙をぬぐってはっと気付くと、明け方の4時である。ああ、寝なければ、でももう少し区切りのいいところまで・・・なるほど確かに面白い話である。

NHKの英会話テキストの終わりの方に掲載されていたコラムだったと思う。パネルクイズ「アタック25」の司会、「そのとーり！！」で有名な俳優の児玉潔氏は大の洋書読書家だそうである。彼が飛行機で移動する際に、この「大聖堂」のハードカバーを持っていったエピソードが紹介されていた。しかし、いったんスーツケースにしまった本が続きが気になって気になってたまらず、氏は乗り継ぎの空港で買ってしまったのである。同じことを他の空港でも繰り返し、とうとうこの大聖堂の原書が3冊ほどそろってしまったとか・・・なるほど、読み進めるとこのコメントは納得なのである。

物語はトム・ビルダーという職人・石工の話である。彼の夢は立派な大聖堂を立てることだが、理不尽な領主の圧制に職を追われ・・・その夢を次世代に引き継いでいくというのが話の流れである。大聖堂の描かれ方、中世封建制、教会の権力争い、大聖堂に象徴させるヨーロッパ社会とは何かということを理解するのに役に立つ。

私が泣けて泣けてしょうがなかったシーンはトムの最初の女房アグネスが、森の中で子供を産むシーンである。これから子供が生まれるというのに、領主の気まぐれのために失業したトム・ビルダー、この一家は、唯一あてにしていた食料の家畜を盗まれ、育ち盛りの幼い子供たちをかかえて、森の中で野宿しなければならない。これまたイタリアのマンマを思わせる気丈な妻アグネスは常に冷静な判断と洞察力で夫であるトムを助けてきた。しかし、さすがのアグネスも真冬の森のなかで産気づいてしまっは為すすべがない。

気力、体力の限界のところ、わが子を産み落とし、「私のために、大聖堂を作っ

ね、トム・・・」といい残して死んでいくのである。多量の出血、やつれ果てたアグネスの顔を見て、トムのみならず、子供たちも母子ともに助からないと思った。しかし、アグネスは元気な男の子を生んでこの世を去るのである。立派に新しい命を残していくのだ。

生まれても飲ませる乳もない。その場に置き去りにされた赤子は、神父に助けられ、神の子ジョナサンと名づけられる。激動の人生が複雑に錯綜しているドラマであり、随所に生きることの活力、生命力の息吹を感じられる作品である。

建築の専門用語が多様されているので、建築に関してまったく畑外のひとには退屈に感じられるシーンも無きにしも非ずである。しかし、大部分においてテンポの速いアドベンチャーが語られるので、中世ヨーロッパにトリップするには十分なのである。

1.2 二度目のイタリア行き

二度目のイタリアはどこを周ったらいいか？

最近よくこういう質問をされる。

中高層、さらには負け犬層のイタリア人気は根強い。みな誰しも一度はイタリアを訪れたことがあり、ローマ、フィレンツェ、ヴェネチア、ミラノなど大都市についてはすでにその魅力を知り尽くしている人である。

ベーシックなアドバイスとして、これらのいくつかの都市を中心にその周辺の小都市を組み合わせるのもいい。

たとえばフィレンツェならシエナ、サンジミニャーノなど中世の面影をそのまま残す小都市を、ミラノならコモ、クレモナ、ベルガモなど個性的で風情のある場所を組み合わせればそれなりに楽しい。

現に、私の企画したツアーはそのセンスとユニークさから、好評をいただいている。これまで訪れたイタリアの都市はかなりの数になり、テーマを絞って独特のツアーを考案している。負け犬の遠吠えかもしれないが、「だて」に放浪しているわけではないのである。